ふらっと旧中山道　　2013.9.27

中津川宿～落合宿～馬籠宿の 10.1km を歩く

9 月 27 日いつもの４人で中山道を歩きに出かけました。まだまだ３０度を超える日が続く中、２６日に天気予報を見ていたら２７日の中津川は２３度だという。これはチャンスと友に連絡して、急きょ出かけることに決定。

馬籠まで行き、中津川へ戻るコース

中津川の先木曽路を歩くのにはなかなか大変、JR の駅がない所や宿場間の距離が 5km ほどのところ、10km 位のところとあり、その上、山の中なのでアップダウンがきついのだ。朝出かけて夕方には戻るコース設定をしなくてはいけないので、歩く距離は 10km 以内にしたい。そこで今回は中津川からバスで馬籠まで行き、落合・中津川と戻るコース 8.5km と決めた。馬籠行きのバスの時間も調べて、先回と同じ東浦を 7:19 の区間快速に乗り込んだ。

今回はさほどの混雑ではなかった、高蔵寺をすぎた辺りの景色は山あり、田畑ありののどかな風景。ふと気がついたのは、田んぼは一面が緑色になっている。すでに稲刈りを終えていて、切り株から緑の芽がでているのだ。黄金色の稲穂は見当たらず、ちょっと意外な感じさえした。

9:21 中津川に到着、駅前のバス停は行き先別に色と番号で分かりやすい表示だ。さらに、英語、韓国語、中国語の表記もあり、国際観光地・馬籠の入口であることが分かる。

小さな発電所と食べ歩き

10:05 馬籠に到着する。馬籠の宿場はかなりの上り坂の途中にあるが、このまま落合宿に向かうか馬籠の宿場の散策はどうするか…..。次回にはここから妻籠宿へ向かうことになるが、バス停から 500m ほど上った藤村記念館まで行ってから落合宿に向かうことにした。道路沿いは昔風の大きな建物が並び、一見して観光地の装いだ。すると、目

小さな発電所

宿場の入口

の前に小さな小屋と説明板がある。何かなと説明板を見ると、馬籠水車小屋 2 号発電所とある。隣には小さな流れがあり、小屋の真下から水が勢いよく流れ落ちている。少し上にある水槽から水を引いて発電する「ターゴインパルス水車」という。水を噴射してタービンを回して 350～400W の発電ができると記されている。この程度の小さな小屋を設置することで発電が可能なら、設置可能な場所も多いはず。要は投資額に対してメリットがどれくらいか、が決め手になるのだろう。

発電所の隣からはお土産の店が並び、名物名産品が並べられている。その隣では串に刺した団子のような五平餅 1 本 150 円を売っている。その少し先では、今度はおやきを売っている。こちらは 1 個 170 円だった。食べ歩きには丁度手頃な食材であり、最近あちこちの観光地でよく見られる。歩きながら物を食べるのは行儀が悪いと教えられてきたが、最近はそうした考え方も変化して、見るだけでなく食べる楽しみも一定のマナーさえ守れば許されるようになった。

それにしても急な斜面にある馬籠宿

歩き出すといきなり急な坂道が続き、階段で上り下りする場所もある。最初の階段のつきあたりに水車のある家がある。ここも発電所としてあるのでのぞいてみたが、発電機はなかった。その建物の前から階段が続き、見上げると両脇に建つ家の 2 階の一部と屋根しか見えない。それくらい急な坂道なのだ、それにしてもこんな急な坂道の途中に宿場を作ったのは何故なんだろう。普通は峠に向かう手前に立て場等の休憩施設を作っている。川にしてもしかりである。友曰く、それくらい道中がきつくて大変だったので途中で休まざるを得なかったのだろう。

振り返ると屋根の高さに遠くの山並みが連なっている。両脇の家は和風の喫茶店であったり、資料館を併設した薬屋さん、暖簾が下がり大八車のおかれた旅籠などが並びいずれも落ち着いた家並みが続く。しかし、これだけ古いたたずまいの家が並ぶとむしろ作為的な感じもしてくる、なんでもほどほどがよい。でも、大きなテーマパークに慣れてきた人たちにとっては、意に介するようなことではないのかな。

馬籠宿は木曽路の南の端にある、木曽路と呼ばれる宿場は１１宿あり、贄川、奈良井、薮原、宮ノ越、福島、上松、須原、野尻、三留野、妻籠、馬籠である。この馬籠宿は本陣１、脇本陣１、旅籠 18 であった。妻籠宿と同様鉄道や幹線道路から取り残されてさびれていた。しかも、明治 28 年と大正４年と二度にわたって大火にあい宿場時代の建築はほとんど失われてしまった。しかし、島崎藤村の生地でもあり、小説「夜明け前」の舞台であったので脚光をあびるようになり、古いたたずまいが復元され観光地としてにぎわっている。

屋根しか見えない勾配

藤村記念館

馬籠宿本陣跡は藤村記念館

馬籠茶屋の水車の向こうにたくさんの花が咲いていた、近づくと萩の花でここはすでに秋のようだ。その先に馬籠宿本陣跡の藤村記念館がある。冠木門に黒塀をめぐらし、すぐにそれと分かるたたずまいである。せっかくなので見学することにして 500 円の入場料を払って中へ入る。島崎藤村の名前と夜明け前のタイトルは知っていても、作品をたくさん読んだわけでもない。実家が本陣を務める家とは知らなかった、藤村は最初詩人として文学的第一歩を踏み出した。しかし、徐々に散文に移行し明治 38 年上京し翌年「破戒」を自費出版して小説家となる。

そして、昭和 4 年～10 年まで中央公論に、父をモデルとして明治維新前後を描いた長編小説「夜明け前」を連載した。是が高い評価を得て昭和 10 年に初代日本ペンクラブの会長に就任している。言うならばお坊ちゃんとして育ちながら、後々まで名を残す小説家になったのだ。藤村といえば夜明け前の「木曽路はすべて山の中である」という名文句は誰もが知るところとなっている。

記念館は三つの展示館に分けてあり、藤村の書いた原稿用紙などが展示されている。他には本陣隠居所が残されている、と言うのも明治 28 年の大火でほとんど消失し唯一残ったのが、この祖父母の隠居所だという。藤村は少年時代に、この二階の部屋で国学者であった父からいろいろ指導を受けたという。

この記念館は昭和 22 年「文豪藤村を顕彰する物を造りたい」と考えた馬籠の青壮年により、ふるさと友の会が結成されて勤労奉仕により建ったという。そして、藤村の長男から 5、000 点に及ぶ資料の寄贈を受け、長野県内の小中高校生、教員より寄付を受け藤村文庫が完成、藤村記念館として開館した。しかし、地理的には岐阜県中津川市に近く平成１７年長野県から岐阜県中津川市に越県合併している。これを知ったら、当時の長野県民の気持ちはどのようなものか、想像に難くない。

戦火をまぬかれた馬籠城は・・・

程々に見学は切り上げ記念写真を撮って、10:55 先ほど上ってきた道を下り落合宿へ向かいスタートする。途中で団子のように串ざしした五平餅を買い求め、食べながら坂を下った。バス通りまできていよいよ宿場を離れるのだが、先ほど買い求めた五平餅のホセを捨てるゴミ入れが見あたらない。食べ歩きをよしとしているのなら、当然所々にゴミ入れを用意するものとあちこち探すと、バス停兼休憩所の建物の裏に一か所だけゴミ入れがあった。

いよいよ街道ウオーキングのスタートで、2 分も行くと家並みもなくなり田んぼがある、背後には山並みが連なるのどかな山村の風景だ。そこで一つ発見したのは刈り取った稲がハザグイに掛けてあった、久しぶりに見る光景だ。そして、ここの稲は切り口に青いシートが掛けられている。雨対策と思うがこのような光景は初めて見る、東浦の方では見られない。しかもこの青いシ

ートが緑の山々を背に、とても鮮やかで際立っていたのが印象的だった。そこから5分程行くと石垣で整備された台に説明板がある、それには馬籠城跡としてあった。この辺

りは丸山とも城山とも呼ばれ、500年ほど前の室町時代から城(砦)があった。戦国時代は武田信玄の領地となるが、その後織田信長を経て豊臣秀吉傘下の木曽義昌が治めた。天正１２年(1584)秀吉と家康が小牧山で対峙した時、秀吉は家康が攻め上がることを防ぐため、木曽義昌に木曽路防衛を命じた。義昌はここ馬籠を島崎重道(藤村の祖)に守らせた。しかし、家康の大軍が攻めてきたのに驚き、重道は妻籠へ逃げてしまう。このため馬籠の集落は戦火からまぬかれることができた。その後家康が天下を制して木曽を直轄領とするが、元和元年(1615)尾張の徳川義直の領地となり、戦禍のないまま馬籠城は姿を消したと記されている。

急坂を登りきると山里の景色

このあたりからかなり急な上り坂で、少し上ると先ほどの集落が下の方に見えるので高低差がよく分かる。坂を登りきり平らになった道を歩き始めると、左側に大きな石碑

がある、それは島崎藤村の父「島崎正樹翁記念碑」夜明け前・青山半蔵としてある。藤村は父正樹をモデルに青山半蔵として登場させ、夜明け前を書きあげている。それを記念して建てられたものらしい。そのすぐ先に大きくて立派な昔ながらの和風の家が２軒並んでいた、見れば「塩」「たばこ」の看板がぶら下がっている。道路より少しだけ高くなった敷地は２段の石垣が積んである。これだけ見ていると、なんだか昔の街にタイムスリップしたような錯覚に陥るが、不安はなく落ち着いた気持ちになれる。最近のモダンな家にはない心に訴える何かがあるのだ。家の前を通り過ぎ振り返って見ても、山を背にでんと構える姿が美しい。その少し先、今度は庭先にくるみが干してあった、それに里芋の茎も並んでいた。くるみはお店で見るものより少し小ぶりであった。

新茶屋の一里塚

そこから８分程歩くと北恵那バス「鍛冶屋前」のバス停があった、しかし、周りを見ても民家はぱらぱらあるかないかくらいで、ここに鍛冶屋があったのだろうかと不思議であった。バスは一日に２本しか走っていないようで、いつまで路線が維持されるのだろうかと心配になる。そして歩を進めると右手に大きな石と東屋が見えてきた。正岡子規の句碑で、彼は明治２２年松山に帰郷のおり木曽路を超えている。そのとき詠んだ「桑の実の木曽路出づれば穂麦かな」の句で、馬籠観光協会が建立した。碑のある場所からは中津川の風景が一望でき、地理的に中津川の方が近いことがよく分かる。そこから 4 分も行くと二つの灯篭があって、国家安全の文字が見える。この辺りが新茶屋で説明板があった、それによると、かつての茶屋はここから岐阜県側へ数百メートルのところにあったが、江戸時代の終わりに現在地に移った。そのためここを新茶屋と呼ぶようになった、わらび餅がここの名物だったという。

そのすぐ先に「是より北・木曽路」の碑があり、街道は落合宿へ向かって分岐する。その分岐する手前に少し小さめのこんもりとした新茶屋の一里塚がある。立派な石碑と説明板があり、天保・安政時代(1830～1860)の一里塚には、京に向かって右側に松が植えられていた。左側はなかったというが、整備にあたり榎を植えたという。

芭蕉の句碑

新茶屋の一里塚

十曲峠(落合)の石畳を歩く

新茶屋の一里塚から右に分岐すると落合の石畳が続いている。一人の青年が写真を撮りながら私たちの前を歩いていた。その青年を追うように歩くことになったが、ほかに

中山道を歩いている人は見なかった。3 分も下ると石畳の説明板があり、中津川市は平成１７年２月に恵北 6 町村と長野県の山口村(馬篭のあった村)との越県合併により新中津川市として誕生しました。ここから長野県側へ 120m は合併記念として整備されたものと言う。したがって江戸時代の石畳ではない、そのためか平らな石ばかりが並べられているわけだ。

そこから少し先には立派な中津川宿と落合宿の説明板がある、それによると「両宿場の間は約一里(4km)しかありませんでした。この二つの宿場は江戸幕府ができる以前からすでに宿の形態が整っていました。江戸から数えて 44 番目の落合宿は信濃国から美濃国へ入る最初の宿場です」

落合の石畳と説明板

くねくねと曲がる石畳の道を 10 分も下るとまた説明板がありそこに記されていたのは、「この石畳も荒れていたが地元の人たちの勤労奉仕で原型を復元しました。往時の姿をとどめているのは、ここと東海道箱根の二か所しかない。中山道ができたのは寛永年間ですが、石畳が敷かれた時期は不明です」。文久元年の皇女和宮の通行と明治天皇行幸の時、修理をして馬が滑らないように砂をまいた記録が残っているそうだ。
平らな石ばかりではないので、草履で歩くのは大変だろうし草履の予備も常に持ち歩いたのであろう。そんな話をしながら歩いていたら栗が落ちているのを見つけ、これはラッキーとばかりみな夢中になって探した。こぶりの栗だったが両手を広げて一杯分拾うことができた。

石畳は森の中を曲がりながら下っていく、上り坂はもちろんきついが下り坂は足を踏ん張って歩くので更にきついものだ。クッションを使いリズミカルに歩くのがよい。25

分程歩いて杉木立の間から日が差し込むようになると、やっと落合の石畳を抜ける。

日本三大薬師の一つ医王寺

　石畳を抜けて５分も行くとお寺さんが見えてくる、入り口に大きなしだれ桜が立っているのが目につく。前まで来ると「山中薬師　浄土宗瑠璃山　医王寺」の看板がある。寺の説明が墨で書かれているが半分は消えており読めない、この寺実は三河の鳳来寺、御嵩の願興寺とともに日本三大薬師の一つと言われているそうだ。古来より虫封じの薬師として広く信仰を集めていました。山中薬師とも呼ばれ、本尊の薬師如来は行基の作と伝えられている。お寺よりも目立つしだれ桜の枝ぶりは見事なもので、地面にふれるくらい垂れている。花の咲く時は大勢の人が見に来ることだろう、振り返ってみると大きな木ばかりが見えて、寺の本堂は隠れてしまっている。できることなら花の咲く時にもう一度来てみたいものだ。

しだれ桜の医王寺

落合宿高札場跡

一度は付け替えられた中山道

　医王寺から８分程歩くと落合川に架かる落合橋を渡る、するとゴーという大きな音がしてくる。上流側に砂防ダムがあるのだ、１０ｍほどの高さだろうか、水が白く泡立って流れ落ちる様はなかなか圧巻で、周りの緑とともに美しい景観を作っている。橋を渡りきって振り返ると、かなり高い所に橋は架かっている。当然昔はこんな高い所に橋を架けられないはずと話し合っていると、説明板があり当時の橋の様子が描かれていた。それによると、江戸時代にはここより少し下流にあって「大橋」と呼ばれていた。それ

と、大橋から医王寺までの上り道がつづら折れの難所であったために、寛保元年(1741)に道筋を変更した。しかし、川向かいに移した道も悪路でそのうえ 1.8km 遠回りとなったため明和８年(1771)再び十曲峠を通る道に戻した。この時につづら折れの道を廃し、北側に大きく曲がって緩やかに上る道に付け替えられたとある。

落合橋を過ぎると直にバスの走る大通りに出る、そこに落合宿高札場の碑が立ちコスモスの花が咲いていた。振り返ると遠く高くに赤い高速道路の橋が、緑の木々の上を走っている。

落合宿本陣と助け合い大釜

大通りを横切って 5 分程行くと落ち着いた家並が続く落合の宿場に入る、初めに黒い漆喰で仕上げられた蔵が目に入る。その前を通り過ぎると少し先に門と塀のある建物があり、カメラのシャッターを押す。前まで来たら脇本陣の碑が手前にあって、隣の立派な門のある建物は本陣だった。この建物の前には水路があり水が流れ、さわやかな雰囲気を醸し出している。でもよく見れば、水路は本陣の前だけでそれ以外は蓋がされている。急に水路が現れたのもそのためで、溝に落ちるのを防止するためと思われる。

ここ落合宿は江戸へ 82 里１２町(約３２３km)、京へ 52 里 9 町(約 205km)の位置にあり、町の長さは 3 町 35 間(約 390m)家数 75 軒だった。宿の町筋の中央には用水が流れ、中ほどに本陣と脇本陣があった。本陣は井口家、脇本陣は塚田家が務めていた。文化元年(1804)と 12 年(1815)の二度の大火は宿に大きな打撃を与えた。その中で表門は、火事見舞いに加賀藩から贈られたものがそのまま残っていると言う。中山道全域に現存する本陣のうちでも、当時の姿をとどめた最も状態のよい建物だという。

落合宿本陣前にて

これ朝顔です

それならばと、本陣の前で記念写真を撮ってから歩を進めた。すると道沿いの空き地に赤いきれいな花がたくさん咲いていた。朝顔のようだが少し違うみたいなので、例により友の細君に聞くと「朝顔」だという。花はこぶりで葉っぱはスペードの形に似ている。それに、ツルベとられて....という感じではなく群生している。

その先に今度は屋根つきの小屋に、「落合宿助け合い大釜」と呼ばれる大きなお釜が置かれている。台の上に置かれているものの、軽トラックの屋根と同じくらいの高さがある。このお釜は寒天を作る時に天草を煮る時に使われたもので、容量は 1.000ℓをこえ口径は 1.5m もある。日本の食文化を支えてきたこの煮炊き道具を、後世に伝え残すとともに今に活用するため「落合宿助け合い大釜」と命名し、さまざまなイベントに活用しているという。そのうえ大釜とともに手押しポンプを備えた井戸も設置し、緊急時の備えとし防災意識を高めることにも役立てているという。

落合宿助け合い大釜

路上の松

「落合宿助け合い大釜」を後にして歩き出すと、前方の道路中央に松の木が仁王立ちになっている。近ずくと、道路端に植えられた松の木が道路の中央に向かって曲がり、そこから上に向かって延びていた。珍しい形で傍らに説明板があり、今は「路上の松」とか「門冠の松」と呼ばれている。明治２４年の道路改修工事で曹洞宗善昌寺の一部が道路となり移転した。しかし、境内にあった松はそのまま残され宿場の入口に格好の風情をそえているのだ。

ランチはおいしいトースト

事前の調べで食堂・コンビニが３軒あるつもりだったが、どこにも見当たらずまもな

く午後１時になる。国道１９号に架かる陸橋から辺りを見回すと、カフェの看板があったのでそちらに向かった。近づくとなんとなく高そうな雰囲気のりっぱなお店だ、ちょっと躊躇したが他にお店もないしランチの文字もあったので入る。

ドリンク主体のお店でランチは３種類ほどのトーストだけで、飲み物は別に頼むスタイル。私も家内もビザと卵のトーストを注文した、かなり時間がかかったがきれいなお姉さんが作ってくれているので我慢できた。それに味も良かったのだ、でも注文したアイスコーヒーは 550 円とトーストより高かった。しかし、ホットコーヒーがしゃれた土瓶に入れてあり、コーヒーで作った氷を入れたグラスは、これまた氷が一杯入った枡に入れて出された。これだけ凝ったものが出されるなら、少々高くてもいたしかたないだろうと思った。

与坂の立て場跡と子野の一里塚跡

１時間ほどのランチタイムの後元気よく歩き出した、しかし、国道 19 号からそれた中山道はかなりの急坂、いきなり出鼻をくじかれることに。周りの民家は雪の時に車の出入りは大丈夫かと心配になるほどで、一歩一歩とゆっくり足を上げないと上っていけない。こんな時にはさすがに自分の年を考えさせられる、それでもゆっくり上っていくと道端に白い花が咲いていた。イチゴに似た葉っぱからまっすぐのびた茎は、途中で数本に分かれて花をつけている。これも友の細君に聞くと菊の種類で名前は「秋冥(しゅうめい)菊」だという、いろいろな菊があるものと思いつつ、美しい花に癒され坂道を上ることができた。

坂をのぼること７分、やっと上りきって平らな道になった。すると、そこには黄金色

秋冥(しゅうめい)菊

坂を登りきると田んぼがあった

の稲穂が実る田んぼがあるではないか。こんな高い所で水はどうしているのかと不思議に思い周りを見回すと、左手奥には少し高い山並みが見える。ここより高い所があるということは水が流れてくるわけだ。しかし、思い通りに水をコントロールするのに何か工夫があるのだろうか、人間困るとすごい力を発揮することができるというから.....。

あとで分かったが上ってきた急坂は与坂と呼ばれている、あまり難所と言われないのが不思議なくらいきつかった。そこから少し先に与坂の立て場跡の碑があった、ここの名物は「与坂三文餅」と呼ばれるものでよく売れたという。

立て場跡を過ぎると今度は急な下り坂で杉木立の中を歩く、そこを抜けると土手にコスモスが咲いていた。どこでも見られるようだが、秋の山里になくてはならない花と思う。その少し先の土手に「子野の一里塚跡」の碑がぽつんと立っていた。塚だと分からないが少しこんもりしている。

大きなしだれ桜と石仏群

子野の一里塚跡から 15 分も行くと子野の地蔵堂跡と石仏群がある。街道沿いに石垣で囲われ少し高くなった所に、とても大きなしだれ桜が一本あり街道まで枝を広げている。説明板がありそれによると、昔この辺りに地蔵堂があったと言われているが所在は明らかでない。ここは無縁の石仏を集めたところと伝えられ元禄 7 年(1694)の庚申塚や地蔵、観音像がたくさん祀られている。また、文政 5 年(1822)の「南無阿弥陀仏」と独特の文字で書かれた徳本上人の名号碑があり、生き仏と言われた彼が文化年間(19 世紀初めころ)にこの地に逗留し布教したことを偲ばせます、と記されている。大きなしだれ桜の下に、十数個の石仏が並ぶ小さな広場はとても大切な場所であったのだろう。300 年余を経た今も、その当時を伝えている貴重なものといえる。

そこから 4 分も行き国道 19 号を地下道でくぐると、中山道の大きな石碑とこの辺りの説明板があった。それによるとこの辺りは上金村で「濃州徇行記」によれば、石高 67 石余りの小さな村で、家数 18 戸人口 85 人だった。国道 19 号により約 20m 中山道は消滅しているが、道幅は 3〜4 間であったという。

中山道を歩くと行政の姿勢が分かる

19 号を離れて 5 分程行くと道沿いに小さな日本庭園のように池が造ってあり、そこには「上金メダカの学校」と書かれた立派な看板があった。その傍らには道祖神もありちょっとのぞいてみたが、メダカは見当たらなかった。しかし、家内はしっかり見ていて「いるいる」と声をあげていた。メダカを見ることが珍しくなってしまった今、こんな池があっても良いと思った。メダカの学校から 5 分程行くと、以前見たことのある「尾州白木改番所跡」の碑が立っている。隣にベンチも置かれ説明板があり、そのうえ榎と思われる大きな木が植えられている。白木とは檜など木の皮を削った生地のままの木材で屋根板、天井板、桶板などに利用した。尾張藩は領外への搬出を厳しく取り締まり、白木や木曽五木(ひのき、さわら、あすなろ、こうやまき、ねずこ)の出荷統制をしていました。ここの番所は天明 2 年(1782)に建てられ、明治 4 年(1871)廃止されました。

尾州白木改番所跡

芭蕉の句碑「すみれ」塚

番所跡から少し先に大きな石碑と説明板がある、芭蕉の句碑で俗称すみれ塚という。「山路きて　なにやらゆかし　すみれ草」貞享 2 年(1685)3 月 27 日ころの句で、句碑は安永 2 年(1773)の芭蕉 80 回忌に建立されたという。

句碑を後にして 5 分ほどで中津川宿の外れに到着する、階段を降りるとその斜面には高札場がある。7 枚の高札が掛けられ、そこだけが昔の宿場を連想させてくれる。ここから街中に入りまっすぐ行くと、中津川駅から延びるメイン通りにぶつかる。やっと現地表示の 10.1km を歩き中津川宿についた。ここまで歩いて、中山道はアスファルトにベージュの小石を散らす、特別の舗装がしてありとても分かりやすかった。さすが中津

川は市であり東浦とは違うと思った。が最後はよくない、宿場内つまり街中へ入ったらその舗装がなくなっているのだ。街中であっても中山道は特別な舗装であるべきだと思ったがいかがであろう。

高札場

今回はたいした距離ではないとたかをくくっていたが、アップダウンのきついコースでかなり疲れた。さすが木曽路だけはある、これからのコースも要注意のようだ。